



〈公開〉作品にみる生と死Ⅱ

死生学研究所

□会場 東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□最寄駅 六本木駅 (日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅 (大江戸線徒歩5分)
(南北線 徒歩7分)

□参加費 各回500円
□事前申込み 不要
□先着 100名様

第2回 研究会

7月10日 (土)
14:40-16:10
(受付14:10から)

■プロフィール

1953年東京生。1978年早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修卒業。1987年同大学院文学研究科史学(考古学)専攻博士課程後期満期退学。早稲田大学人間科学部専任講師、同助教、同教授を経て、2004年から現職。専門は日本考古学(近世)。博士(人間科学)。1980年代中頃から、東京の地下に埋もれている近世都市江戸の遺跡の発掘調査に関わり、墓制・葬制を中心として、考古学からみた新しい江戸像を描こうとしている。

■主要業績

『近世墓制の変遷と家意識』『史観』121 早稲田大学史学会 1989。「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館 2004。『六道線の考古学』(共編著)高志書院 2009。

谷川章雄

(たにがわ あきお) 早稲田大学人間科学学術院教授

墓からみた近世都市江戸の社会 —身分・階層の表徴としての墓—

内容紹介： 墓は葬られる死者のためのものですが、そこには墓を造った生者の観念や死者をとりまく社会が投影されています。江戸の墓の最も大きな特徴は、遺体を納める埋葬施設がバラエティーに富んでいるという点にあります。こうした多様な墓は、葬られた人の身分や階層をあらわしており、将軍家から庶民まで多種多様な身分・階層の人々が差別化され、共生していた近世都市江戸の一断面を鮮やかに示しています。江戸の墓と家や個人との関わりを通じて、墓からみえる江戸の社会を考えることが今回の講演のねらいです。

第4回 連続講座

7月10日 (土)
16:20-17:50

■プロフィール

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。ハイデルベルク大学(Dr. phil.)。2005年から現職。専門と関心分野は、西洋中世美術史、キリスト教図像学から宗教美術全般。

■主要業績

「ヒルデガルト・フォン・ビンゲンにおけるヴィルトゥテス」『異界の交錯』上下巻(共編著)リトン 2006。「ヨブ夫妻の図像学」『経験としての聖書』リトン 2009。「宗教美術研究序説」『宗教史とは何か』下巻 リトン 2009。「『よきサマリア人』の譬え—図像解釈からみるイエスの言葉」三元社 2010。

細田あや子

(ほそだ あやこ) 新潟大学人文学部准教授

「生命の木」のイメージの多様性

内容紹介： 種が地にまかれ、新芽から葉が出て枝が伸び、さらに幹が育ってやがて大木になるという樹木のあり方は、生命の誕生やその成長の比喩として明白なものといえます。また「わたしはまことのぶどうの木」という聖句も想起されるように、イエスに連なったキリスト教共同体というイメージも木で示されることがよくあります。そこで本講座では、キリスト教図像だけでなく他の文化圏の作例も含めて、木のモチーフによって生命の連続性が表現されたさまざまな美術作品をみながら、そのイメージの多様な意味を考えてゆきます。

第3回 研究会 10月9日(土) 14:40-16:10 参加費500円
遠藤 潤 國學院大学研究開発推進機構准教授
近世日本のスピリチュアリズム—文人の著述にみる

第5回 連続講座 10月9日(土) 16:20-17:50 参加費500円
服部健司 群馬大学大学院医学系研究科教授(医学哲学・倫理学)
ドラマで考える医療の倫理



お問合せ先

東洋英和女学院大学死生学研究所
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp
03-3583-4035 (fax専用)